

上信日記

清水浜臣著。一八一九年・文政二（1819年）閏四月十

五日の項。江戸の医者・文人で上州と信州の旅日記。

十五日朝のほといさゝかくもりたれと晴にけり今日ハ戸隠
山にのほらはやとて茂雄と従者と三人してわりこさゝえや
うの物持てたちいつ二十町はかりのほれハ荒安村と云に飯
綱権現のみやしろ有石坂五十餘級をのほりて拝殿本社神さ
ひたりかたへに神主の家居つきくし名をハ仁科甚十郎と
云とそまことの神室ハ岩もてつくりたるかこゝより二里半
のいたゝきに有て戸隠のいたゝきとならひたてりこゝまで
ハ戸隠飯綱山の根ハひとつにて嶺は二つにわかるゝなりさ
れは戸隠まうてする人のすくやかなるハ戸隠より飯綱へか
けてまうつることなりとそきて此山路十二里あまりになる
とかやかくて戸隠へと分のほるに三十餘丁にしてたひらな
る荒野にいたるゆくての右ひたりに池あり桃李藤つゝし
はゝこすみれこゝかしこに今をさかりと咲みたれたり北に
あたりて並たてる峯とも雪にうもれて見ゆいつくそと問へ

ハ飛弾のやま／＼なりと云見わたしいと近しおもふに越中
をへたて／＼はるかなるをた／＼目のまへにみゆるかあやし雲
雀啼呼子鳥なく又身には綿衣かさねきたるに袖ふく風はた
へにしみて寒し二十町はかりうちひらきたる所の池のみき
はにしはしいこひてこ／＼のさまをた／＼ありのま／＼につ／＼け
たるか長哥のやうにき／＼なされぬ

みす／＼かるしなぬの國の岩そ／＼く水内あかたにあり
た／＼す戸かくし山の神嶺をわか越来れはくは／＼れる卯
月のもちにわたぬきをかさねきそふに山風のうちふく
たひに衣手ハさえてそとほれ四方八表に見わたす山遠
近に晴ゆく高嶺おしなへて雪そうつめる呼子鳥林に鳴
そ荒野らに雲雀ハあかり藤つ／＼しは／＼こすみれハ道の
へに咲こそにはへ見のきはみき／＼のこと／＼二月の空
おもほゆることのあやしき

遠方の雪ふく風に雲雀たつこのあら野らハ夏なかりけ
り

戸かくしの山路につ／＼くいつな山いつなからへて又も
とひ見ん

十丁はかりゆきて一ノ鳥居にいたる石にてつくれるか高さ
二丈あまりも有へし麓よりこゝまで四里こゝよりお奥の院
まで一丁ことに石のしるしをたつ七丁ゆけ八大久保とて賤
かひとつ屋ありしはしいこひて又のほれは道のゆくて右も
左もしりへも岡も谷もたゝひとつらのつゝし原にて花ハ世
の中にみなれしよりハいと大きやかなるか今をさかりはと
にほへるえもいはれぬさまなり十町行て左のかたに日の御
子権現と云宮居あり石坂拝殿本社あり大日靈尊をいつきか
しつき奉るなるへし三丁のほりて二の鳥居にいたる人いこ
はす家五六軒ありこゝにてわりこのいひくひさゝえの酒の
みていこふ本社ハ釋迦佛にてかたへに神樂堂あり別當勸修
院両界山顯光寺とて寺領千石いと棟々しきすまひなり此顯
光寺ハ東鑑拾芥抄などにも見ゆ末寺十二院つゝけり又い
さゝか左に入て葆光院といふありこゝは地藏尊をいつきま
つる末寺又十二院あり奥院ハ觀世音菩薩にてこゝにも十二
院の末寺ありすへて三本堂三十六末寺とそ聞えしさて本社
より奥院まで三十丁あり九町のほりたる所に村上帝の御世
康保年中に長明法師といへるか火定の所なりと云あり此法

師がことハ元亨積書忍行部云釋長明居信州戸隱山年廿五絶
言語誦法華亦三歳不偃臥一日語人曰我是一切衆生喜見菩薩
也来此所焼身已三回今命盡上兜率便積薪入内自焚康保年中
也^{以上}とみえたり又四方にめぐらして六十六の石社あり左右
に供養塔の碑と六十六社縁起の碑と二つたてり文ハいつれ
も栃原の大昌寺麟瑞和尚のものされたる也又五丁のほりて
比丘尼堂ありこゝより女人結界の地なり十五丁目に又白木
の鳥居あり高さ二丈あまりなり廿三丁目に二王門あり三十
丁目に奥院にいたりつきぬ莊嚴いときらひやかなり堂の下
の滝川に橋をわたせり此川皆雪にうつもれて雪の下を水流
るその雪の上をふみわたれハ一丈二丈はかりの石むれたて
りかたへに宮居ありて九頭龍大権現と云額をかくこゝの傳
へハ神代のむかし手力雄の尊天のいはとを引はなちて隠し
置給へるより山の名とせる也といへどいとくうけかたし
かくて荒安まで歸り来て茂雄と従者とをハかへしぬ坂中に
て茂彬真蔭あひたりこゝまでむかへに出たる也とて酒筒と
うてたるに望月のかけ木の間よりさしのほりたるさまいは
んかたなし成忠時孝も又こゝまで出むかへて打つれかへる

に成忠か家よきぬ道なりけれハ人々とゝもに立よりぬある
し末茶を點してもてなすあるしハこゝの代官なりけれハ家
居つきくゝしますかまつかなと云魚てうしてもてなすこと
いとまめやかなりかまつかハ和名抄に鮓の字をよめれとま
のあたり其魚をくふことなかりしをめつらし味もいとよし
夜ふくるまでかたらひて常徳院にかへれハ丑の時過にけり
十六日 くもりぬ今日は仁禮村なる羽生田修平かりへと思
ひたつ（以下略）

註 新日本古典籍総合データベースの「上信日記」(DOI
10.20730/100139406) の 25〜28 コマ目。矢羽勝幸
編「江戸時代の信濃紀行集」に浜臣の自筆稿本から
の翻刻があり参考とした。

なお書陵部本には「右も左もしりへも岡も谷も」と
あるが、自筆稿本は「右も左もまへもしりへも岡も
谷も」となっている。書陵部本が欠であろう。